新制作

SHINSEISAKU

国立新美術館

2017.9.20 - 10.2

Vol.74 / 2017

冬号

新制作協会　広報誌

審査陳列報告

■絵画部

金森 宰司

一般出品者392名総点数890点の作品を9月8、9日国立新美術館バックヤードにて審査しました。カテゴリーⅡとⅢは1票差で入選落選など微妙な作品が何点もあり、きびしい審査となりました。展示は2段掛けをしないという伝統があり、スペースの関係で絞らざるをえないこと、ご理解いただかなければなりません。最近の傾向としてアニメや映画のキャラクターを使った作品も見られました。その中で著作権について問題になり、適宜その作品について判断し審査をしました。

賞の選考では今年から投票方式が変わり、それぞれがカテゴリーごとのトップと思う作品1名と、カテゴリーに拘らない5名の計8名を投票し、結果、新作家賞7名、絵画部賞9名、損保ジャパン賞1名、新会員に2名が推挙されました。この19名の中に2名の外国籍の方が含まれています。会が国際色を帯びてきました。

すべての配置は展示担当者15名の苦労の跡です。2階2室に具象系、3室に抽象系（昨年とは逆に）を配置、3階1室は大作だけにして迫力系、全体に会員作品はできるだけ距離を取って見られるようにしました。一般では会場を順路に従って流れを作り、全作品に目が届くようにと工夫しました。2点入選作品には昨年同様に広いスペースを2階と3階に作り、そこの展示は迫力あるものになりました。審査で厳選された作品と各スペースの展示担当者の工夫で、会員作品とともに一般作品の魅力が出た新制作展になったのではないでしょうか。

審 査	入選者数	2点入選者
カテゴリーⅠ（H140cm×W140cm×D30cm 以内）	37名	2名（内1名は3点入選）
カテゴリーⅡ（H205cm×W205cm×D30cm 以内）	127名	10名
カテゴリーⅢ（H300cm×W300cm×D30cm 以内）	105名	12名
データー画像審査（30 歳以下）	17名	2名

■彫刻部

長谷川 喜男

第81回展の審査を9月8日と9日の両日で行いました。図録にある石松委員長の言葉のように、会員は創立期の精神を受け継ぎ、新鮮なる表現と純粋で高貴な造形を求め審査に臨み、出席会員の過半数の同意で入選・選外を決定しました。

彫刻部は第45回展において、搬入点数444点、搬入者数214名の記録がありますが、その後、搬入点数・搬入者数は大きく減少してきました。今年度も、昨年より搬入点数が2点増えた111点、搬入者数76名にとどまりました。彫刻がいろいろな空間に設置された時期と比べると、制作し続けることは社会的にも物理的にも厳しい状況であります。まして、作品搬入等の負担も大きいものがあります。そんな状況の中で熱意をもって搬入された作品には、自己のテーマを深く追求した高い水準の作品が多くありました。厳正な審査の結果、入選点数66点、入選者数63名、2点入選3名　初入選者数9名（内1名は絵画部入選歴あり）となりました。

陳列後、受賞作品候補の投票と授賞会議を行いました。新しい思考に挑戦しながら斬新であり洗練された作品が選ばれ、会員推挙4名、新作家賞6名が決定しました。

陳列については、具象、抽象、素材、大きさ、量感、空間等を考慮し、作品151点（会員作品85点、入選作品66点）の配置に変化を持たせながら観やすく展示されました。室内・野外ともに会場に拡がりが感じられ、会場全体にメリハリのある充実した展示空間となりました。また、昨年から行っているデッサン展示も好評でした。

81回展においても、新たな可能性を秘めた彫刻の魅力が発信できた展覧会となりました。今後もこの魅力が広がる新鮮な展覧会でありたいと思います。

■スペースデザイン部

伊藤 哲郎

今年は一般作品47点、ミニ作品63点、計110点の応募がありました。昨年からは10点の増加ですが、その全てはミニ作品の応募によるものです。制作の手軽さから今後も増えてゆくのでしょうが、陳列できる点数には限りがあり、入選率35％の激戦区となっています。反面、床作品の応募は減少、小型化の傾向もあるようです。省エネとか低成長、管理化といった社会風潮とシンクロした状況のようにも感じます。

例年の審査は、応募作品ごとに取り囲み入選・保留・落選の三択での挙手による評価をしながら一周。二周目で保留の作品を入落二択の挙手による多数決で最終決定していました。今年の審査に当たっては新たな目論見として、事前に全作品の評価リストを作成し、各会員がそれを手に自由に観て廻り、入選・落選の評価を書き込み午前中に提出。昼休みを挟んで、その集計結果から、入落の明らかなものと評価が均衡したものを選別し、後者のみ作品の前で二択の挙手による多数決で最終決定としました。お陰で会員の疲労度はかなり軽減し、時間の余裕もできたのですが、合理化しすぎた感もあり、物足りなさを訴える意見も多くありました。

陳列は、事前に全作品のサイズや写真を睨みながら模型上であらかたの配置を決めてゆきます。今年は壁作品で横位置のものが多く、窮屈感が危惧されていましたが、蓋を開けてみればそれほどでもなく、かえって床作品の量感の希薄さが気になりました。中央に置かれた白いミニアチュール展示台の配列で、かろうじて空間の緊張が保たれているといった印象でした。また、今年に限ったことではないのですが、展示室のあまりに均質な照明環境により、各作品の奥行き感や素材感・質感が盗み取られ、取分け臨場感の無さというか居心地の悪さを感じた今回の展示でした。

企画・展示報告

■絵画部

藤田 邦統

無事に81回展が終了いたしました。
オープントーク、ギャラリートークと出品者との意見交換も活発に行われ、多様な考え方に刺激を受けたかと思います。
エネルギッシュな若手からベテランまで幅広く力ある作品が展示されました。特に若手の充実した制作には新制作らしさのようなものを感じました。
真摯に作品に向き合う作家の姿勢が展覧会場を緊張させ、様々な問題意識を提起しています。
1年のピークを新制作に持ってくる。すべての出品者の体になじんでいるのではないでしょうか。
さあ、来年に向けてのスタートです。ピークを押し上げる裾野を広げながら新制作のマークの示す前進と向上の82回展を目指していきましょう。

■彫刻部

加藤 裕之

第81回新制作展、彫刻部は出品規定で重量制限だけを残し、サイズをフリーとしましたが、新たな表現の可能性を見せてくれた作品を展示することができました。勿論、サイズが作品の善し悪しを決めるわけではありませんが、その表現にとって必要な大きさ、必然的な量があると言えます。昨年までなら規定外という事で展示できなかった作品も、今回は授賞作品となりました。彫刻部の新たな挑戦に見事に応えてくれた作品であり意欲と言っていいでしょう。一歩踏み出して、新鮮な展開を見ることができた彫刻部展示だったと思います。

また、ギャラリートークでは、若い作家同士が作品を前に語り合い、やり取りするという構成で、大勢を集め大盛況となりました。更に、展示室奥の壁面には昨年好評を得たデッサン展示を継続しました。彫刻家の平面作品という事で興味深げに観入るお客様が多かったように感じました。会員によるチャリティへの出品も多く、賑わいを見せました。結果的に80回記念展を上回る成果となり、熊本城災害復旧支援金として寄付する事ができました。

さて、石松協会委員長がよく仰る「新鮮なる造形を」という言葉。それは、作品は元より制作に対峙する自分自身が新鮮でなければならないという事なのでしょう。新制作展を前にワクワクする気持ち、ドキドキする緊張感を持ち続けるのは案外難しいのかもしれません。しかし、いつでも新鮮でいようとする事は、真摯な制作の土台であり、新たな制作を続けていく為に一番大切な事なのだと改めて感じました。

■スペースデザイン部

二井 進

スペースデザイン部は9月23日、部の企画として会員の前田氏によるレクチャー講演、その後陳列会場にて自由参加によるフリートークを行った。

レクチャーの内容は作品制作をする上でバックボーンとなる思考プロセスについての講義。体験学習では、触れる、分解してみることで、素材のもつ特性を活かした表現、制作の方法や技術を学び、表現の可能性を探るという内容だった。日常手にする素材（紙、糸、クリアファイル、糊）を通して表せる形は、参加者にとって興味の持てるものであったと思う。レクチャー後の作家との質問、対話も盛況であった。

会場でのフリートークは新会員、受賞者、会員の作品について制作者本人からのテーマ、制作技術・技法、素材等についての説明や参加者との質疑応答が行われた。

部の特徴として様々な素材（糸、金属、樹脂、木材、土、紙･･･）、それに伴う様々な技法・表現方法、色彩があり、多様な展開が行われ表された会場でのフリートークは、参加者にとっても作品について作者の表現しようとする意図を感じ取ることのできる良い機会ではなかったかと思う。

彷徨ノイ下

ボルドーに発して

絵画部会員　福田 徳樹

1982年夏、G 大の卒業生や現職教官を含むヨーロッパ美術ツアーに勤めの許可をえてやっと入れた。全24日、ギリシア、エジプト、イタリア、スペインと巡って、マドリードから夜行寝台の上段に入った。下の台には年も近い日本画出の夫婦。疲れて、明日にはパリという真夜中、列車が徐行して大きな鉄橋を渡っている。寝床上の小さなカーテンごしに、夜目にもたしかに、カテドラルや街が、暗い中に影絵のように浮かんでいた。どこだろう。しばらく考えて、距離的にボルドーだと気づいた。迫力に満ちて。あこがれの。必ず来るぞ、とその時心に誓った。翌朝明るくなり、上から列車の床を見ると、どこから乗ったのか女子供を含む沢山の人が蠢いていた。そのままオランダに行く出稼ぎの一行だった。

それから10年、独りパリから南西部のロマネスクを訪ねた。その初めにボルドーに入った。駅舎は小さく、さびれた下町にあった。中心部のホテルに向かうタクシーから瞬間、コンセルヴァトアール・ティボーの字が入った建物が。好きな彼、ここの生まれだったのか。

翌朝早く、小雨の中をサンタンドレ大聖堂の、ロマネスクでいてゴシック的なものも共通に感じられる名寺院の鐘楼に上ったら、若い男がこちらの動きのままについて来る。市内はよく見えた。留守番の学生と名乗ってくれた。

次に、アキテーヌ博物館へ。さすがにワインの採り入れ車や用具と共に、地元のロマネスクの石の装飾や彫刻が数多く、充実。天井が低く、奥深い部屋が延延と続く。

次は美術館、ドラクロアの若い頃の「ミソロンギの廃墟に立つギリシア」が中央に。

中学生の若い頃、『美術手帖』にボルドー出身のアルベール・マルケ（1875～1947）が、長崎など港の風景をバーント・アンバーと青をまぜて、うすいおつゆ描きした独立の野口弥太郎（1899～1976）と同時的に出ていて、真似て影響を受けた。マルケの風景を見たかったが、その時は人物像が2点だけ。そんなこともある。図書コーナーには、大冊で充実したものもあったが、若い店員、送り方がわからないとらちがあかない。

マルケは墨絵を知っているようなうす塗り。マティスと並ぶデッサン力の人だ。

アルベール・マルケ（1875-1947）
《ロッテルダム》1914 年
キャンバス・油彩、パリ国立近代美術館蔵

ティボーについて。その著『ヴァイオリンは語る』の書き手は別にいて、聞き書き的なものだが、面白い。幼年期、2階から夜、かすかにヴァイオリンの音が。“僕は貴方の音を聞くとよく眠れます”とたどたどしい字の手紙を書き、ドアの下にしのばせる。何回も。やがて病弱の女は引越していく。彼は早くに母を失っていた。優れたヴァイオリン教師の父から、兄達も共に特訓を受けて育った。16才か、すでにパリの小劇場でリサイタル。ある夜客席の中ほどに異常な集中力をこめて聞く人を見つける。終わって楽屋を出るとしとどの雨。さっきの男が近づき、お若いのアブサンをおごる、と。バッハは最高とか、語ってやまぬ。やっと止んだ雨に、街灯の彼方にぬれて輝く緑の葉。なあ、我我はあの緑のようにならねば、と消えた。それから3か月か、その人の顔が新聞に。ヴェルレーヌ死すと。ボルドーの半日、CD をさがしまわったがない。やっとベートーヴェン、モーツァルト、ラロの入った2枚組は今も宝だ。その演奏は古いかもしれない。だが彼は心で弾いている。

ナポレオンが架けさせたというガロンヌ河の眼鏡橋のデザインは優雅だ。そこまで来てどしゃ降りに遭った。ひき返すよりない。橋のたもとに石蔵みたいなものがあり、暗い中に大勢の黒いのが飲みながら雨待ち。こっちへ来いというが、恐かった。でも、今も何故交流しなかったのか悔やまれる。やがて雨が止むとみごとな虹が橋の真上にかかった。

帰ってからすぐ敬遠していた出身のモンテーニュ（1533 - 92）を開いてみた。その哲学はエセー（随筆）であったのだ。

英国にとってワインはまさにすいえんの的、12世紀から約3世紀間、ガロンヌを130キロくらい遡って、植民地的にした。

滞在中のある日、当時の巨大な円柱の黒ずんで立つ、貯蔵庫であった歴史的建造物が放置されていたのを現代美術館として公開する日に当たった。たしか「食のあり方」とした綜合テーマだったと思うが、例えばラベルを貼らぬ缶詰のカンをワゴン車に積み並べた陳腐なのから、トロール船の長大な赤・黄・白のロープを、100メートルもあろうか自由に張りめぐらせた秀逸なのまで。近くで見ると太い。新品なので輝いている。径約10㎝もあったか。

帰りの夕、街中に「ボルドーのパン」とある木造の素朴な店に、勤め帰りの女性が沢山、ひたすら食い、飲んでいた。

ドラクロワ（1798-1863）
《ミソロンギの廃墟に立つギリシア》1828 年
キャンバス・油彩、ボルドー美術館蔵

新制作下

「はい！どうぞ」という話し

スペースデザイン部会員　山下 勘太郎

朝、昨夜遅かった私の起き抜けに、いきなり上さんからきつい声が掛かりました。今日は紙の日で、玄関に出しておいたから「はい！どうぞ」にしといてよ、と。これを通訳しますと、「出しておいた紙ごみをシッカリ束ねて、運びやすい様にまとめておけよこの飲んだくれ！」となります。

以前我が家の前がゴミの集積場だった頃に袋が割けて散乱する生ゴミや、結び方が緩く雨の中でばらばらになった新聞紙を懸命に集めている収集員の人達を視るにつけ、その大変さに、処理場に運んで貰うのだからもっと持ち易く、運び易い様にきちんと梱包して「はい！どうぞお願いします」ぐらいの気持ちで出すことが出来ないものかね、などとよく話していたことからこの言葉が、我が家では、何時の頃からか符号のように使われ、ゴミ出し前にこれで「はい！どうぞ」？等と娘に聞かれたりもしています。ちなみに、飲み歩いて遅かった昨夜の夜食のテーブルは「はい！どうぞ」からはほど遠い・・でしたが。

実は、この言葉、我が家のオリジナルではありません。かつて新日鉄釜石のラグビー部で「天才的スタンドオフ」と言われて、活躍していた松尾雄治さんの言葉なのです。今でも時々テレビやラジオ等で彼が話しているのを耳にしますが、口癖のように二言目には「オレは馬鹿だから」を繰り返すご本人のことですから、この言葉を忘れてしまっているかも知れませんが・・・。かつて新日鉄釜石が社会人リーグ・日本選手権で連覇を続けていた（結果的に 7 連覇）1980 年前後のときのある試合で、相手が何処だったか「オレも馬鹿だから」記憶にないのですが、自陣のゴ ール前の辺りでボールを受けて走り始めた彼を全員がフォローして 15 人全員参加でパスを繋ぎ続けて相手ゴールに飛び込むという、それは見事なトライがありました。私の中でこの時のトライはいまでも、もっとも美しいトライの一つとして記憶に残っています。

後年、確かテレビでだったと思いますが、彼がこの時のことを聞かれて、この連続パスについて「ただ投げれば繋がると言うモノではなく、やはり全員が『はい！どうぞ』という気持ちを込めて相手に渡していった結果だと思う、そうでなければ、あれ程上手くはつながらなかったでしょう」という意味のことを話していたのを聞いて「次の人の為に」ということを考えることの大切さを、簡潔に表現した言葉として「はい！どうぞ」は私の中の何処かに引っかかっていたようです。

こんな言葉がさらりと出る辺り、ご本人が自分でいつも言っている程馬鹿だとは思えません。第一「スタンドオフ」というポジションは監督がグランドに出てこられないラグビ ーでは「司令塔」とも呼ばれゲームを組み立てる重要な役目で、その上「天才的」付で呼ばれていたという彼なのですから・・・。

ところで私達は日頃、言葉やモノを人に渡し、渡されながら生活しています。つまり繰り返される多くのパスが生活と言っても良さそうです。こんな噺も聞きました。私と同じような爺がコンビニでビールを買い、レジの娘にご存知の画面にタッチと言われ、なにやら虫の居所の悪かった爺が「オレが二十前に見えるか？」と聞くと、じっと見返した娘が「見ようによっては見えなくもないですよ、はい、どうぞ！」と言われて、すんなりタッチしてしまったと。「はい！どうぞ」もなかなかに効果的ではないですか。次の人、相手の為を考えることが出来ることは、たとえ一過性の場合でも心地よい人との関係をうみだす要素のようにも見えます。私達が新制作展に出品するのも会場に観に来て下さる方達への作家の人達から「はい！どうぞ」と送るパスなのではないかと思ったりもしています。

私はここ数年、作品を、新聞などに時々掲載されているのを見かける「意見広告」のようなモノにしたいと考えながら創ることを心掛けています。このように、先ず「伝える」ということが目的であるとするデザインの分野での仕事の場合は特に「はい！どうぞ」の気持ちが大きな比重を持つことは言うまでもないことだと思っています。

絵画・彫刻の会場で出会う作品に触れるとき、受け取り易いパスを投げてくれる方、とても「はい！どうぞ」とは思えないパス、取れるモノなら取ってみろという剛速球のようなパス、パスなどという他者との関係を拒否するような出逢いもあり、とまどいましたが、それを楽しんだりも出来るようになりました。建築というデザインの一分野の井の中の蛙であった私の目からは考えられないパスに、ただ驚いていた初入選の頃を懐かしく思い出したりもしています。

その頃の懇親会はいつも三部合同でした。まだお元気であった創立会員の方達が気軽にSD部の人達のところにやって来て、本当に小さな部だった私達をよく励まして下さったのを思い出します。そうして、それは先達の方達が互いに模索しながら、おそらくは逆境とも思える環境の中で創り上げたであろう新制作協会から建築部（現SD部）に「はい ！どうぞ」と送り続けてくれていたパスでもあったのだと思い、今も感謝しています。

今、先達の方々が創り、パスしてくれた素晴らしいボール「新制作協会」の形を・理念を・変えること・壊すことなく守って、「はい！どうぞ」と正確で優しいパスを次の世代の人達に送ることが、私達に与えられた役割ではないかと感じています。

訃 報　（平成29年10月31日現在）

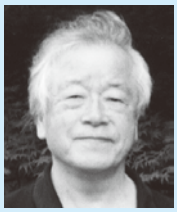
新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

一居 弘美 氏
絵画部会員

平成 29 年 5 月 28 日逝去
（享年 55 才）

尾松 直 氏
絵画部会員

平成 29 年 7 月 24 日逝去
（享年 86 才）



新会員紹介

絵画部

かきはら　やすのぶ
柿原 康伸

24歳の時にテキスタイルデザイナーとして独立しましたが、30歳の時油絵の魅力に惹かれ、これを生涯の仕事に決めました。第40回展に初入選し、途中病気で8年休会しましたが再起。今回会員に推挙して頂きましたのも諸先生、先輩方の温かいご指導と励ましのお陰と感謝しております。

◆ 1937年和歌山県生まれ。
1974年大阪市立美術館付設美術研究所入所。
1976年第40回新制作展初入選。
第77回、第80回記念新制作展 新作家賞受賞。

こんどう　おりが
近藤 オリガ

2007年に来日し、翌年の新制作展に初入選以来、目標は入選して作品が東京で展示され、出来るだけ多くの人に見てもらうことでしたので、予想もしていなかった会員推挙の通知には大変驚き、また戸惑っています。今後もこれまでと変わることなく緊張感を持ち、流行に迎合することなく自分の作品制作に励むつもりでおります。

◆ 1958年ベラルーシ生まれ。
1983年ベラルーシ国立美術大学卒業。
2013年第1回損保ジャパン美術展FACE2013優秀賞。
2017年第2回アートオリンピア入賞。
第75回、第78回新制作展 新作家賞受賞。

彫刻部

きたじま　かずお
北島 一夫

今後の目標として、この自然界や宇宙に目を向けながら、今まで培ってきた感性に新しいものを加えられるよう真摯に取り組んで行こうと思います。
またこれからも新制作協会を基盤とし、会の皆様と共に作家活動を継続して行ければと願います。

◆ 1941年東京都生まれ。
1962～67年東京芸術大学で彫刻を学ぶ。
1972年イタリア留学、75年ミラノのパガーニ画廊で個展。
1983年ハンブルク国際石彫シンポジウム参加。
第80回記念新制作展 協会賞受賞。

彫刻部

こやなぎ　じゅん
小柳 順

学生時代から毎年新制作展に出品し評価してもらうことで、迷いながらもあきらめることなく進んでくることができたと感謝しております。あこがれの先生方からご指導いただいた一言一言を胸に刻み、これからもさらに前進し続けることができるように、より一層努力して行きたいと思います。

◆ 1972年秋田県生まれ。
1996年第60回新制作展初入選。
1998年筑波大学大学院芸術研究科修了。
第79回、第80回記念新制作展 新作家賞受賞。

たかの　まさあき
髙野 正晃

今でも憶えています。
まだ都美館に作品を搬入していた頃、エレベーターで作品を持ち込み、扉が開いた瞬間のあの緊張感。常々、作品は自分の生き様が出ると思っています。今の僕の仕事は本当の自分なのか。
自分をもっともっと律して制作していきたいと思います。色々な方々にご指導いただきました。「恩の重きは師の徳を最とす」の心境です。

◆ 1965年福島県いわき市生まれ。
1988年 第52回新制作展初入選。
1990年 武蔵野美術大学大学院 造形研究科美術専攻彫刻コース修了。
第77回、第79回新制作展 新作家賞受賞。

たじま　たかおき
田島 享央己

このたびの会員推挙、誠にありがたく思っております。
これもひとえに諸先生方のご支援の賜物と、心より感謝申し上げます。これからも努力を惜しまず精進していく覚悟でございます。
まだまだ若輩者でありますので、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

◆ 1973年千葉県生まれ。
2000年愛知県立芸術大学美術学部 彫刻科卒業。
第78回、第80回記念新制作展 新作家賞受賞。

スペースデザイン部

おおひら よしこ

羊毛が自分の手の中で固くフェルトになっていく不思議な面白さと楽しさで表現した作品を出品してきました。これまでお世話になった方々に感謝申し上げます。新たなスタートラインに立ち、自己をみつめ自然を感じ制作に精進してまいります。

◆ 1946年北海道生まれ。
2002年第66回新制作展初入選。
第80回記念新制作展 第80回記念賞受賞。

のぐち　まり
野口 真理

自然とふれあい触発され、制作を続けて表現の深さを感じてまいりました。これからも自分を見つめ継続して行きたいと思います。

◆ 1957年北海道生まれ。
1977年女子美術短期大学造形科卒。
2002年第66回新制作展初入選。
第71回、第80回記念新制作展 新作家賞受賞。

── 第81回新制作展受賞者 ──

［新作家賞］

■ 絵画部（7名）

奥田 善章 / 小山 剛 / 仲田 道子 / 蛭田 美保子 / MARTIN FAUSEL / 吉成 文男 / 和田 和子

■ 彫刻部（6名）

浮田 麻木 / 小口 偉 / 香取 宏幸 / 小嶋 満明 / 田中 和之 / 仲田 耕治

■ スペースデザイン部（3名）

神 芳子 / 関家 美紘 / 西野 芙佐子

［絵画部賞］（9名）

緒方 和美 / 甲斐 美奈子 / 加藤 恭夫 / 塩田 志津子 / 柴田 貴史 / 塚崎 聖子 / 能勢 まゆ子 / 藤田 憲一 / 吉野 芳子

［損保ジャパン日本興亜美術財団賞］

下倉 剛史

《受賞作家展 開催のご案内》

■ 絵画部

2018年1月25日 (木) ～ 2月2日 (金)
11:00 - 18:00
[最終日] 16 : 00 終了
会場：INOAC 銀座並木通りギャラリー
中央区銀座 2-4-14
TEL. 03-5524-5185

● オープニングセレモニー：1/25 (木) 16:30–18:00
● オープニングパーティー：1/25 (木) 18:00–20:00
会場：「えん」銀座店 / TEL. 03-3538-5496

■ 彫刻部

2018年2月5日 (月) ～ 2月16日 (金)
11:00 - 18:30
[最終日] 17 : 00 終了
[休廊日] 2月11日 (祝) 、2月12日 (月)
会場：ギャラリーせいほう
中央区銀座8-10-7
TEL. 03-3573-2468

● オープニングパーティー：2/5 (月) 17:00–18:00

■ スペースデザイン部

2018年2月4日 (日) ～ 2月9日 (金)
10:00 - 18:30
[初日] 13 : 00 -　[最終日] 17 : 00 終了
会場：建築会館ギャラリー
港区芝5-26-20
TEL. 03-3456-2051

● オープニングパーティー：2/4 (日) 16:00–18:00

《入場者数》

第81回新制作展の入場者数は、全日程合計40,291人（無料・一般有料入場者合計）でした。

《巡回展日程》

● 新制作展 (神戸)
兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリー
11/1(水)～11/8(水)　※休館日11/6(月)

● 名古屋展
愛知県芸術文化センター 8Fギャラリー
11/21(火)～11/26(日)　※休館日なし

《新協友》

【絵画部】
今崎 順生、奥田 善章、仲田 道子、野田 恭吾
藤原 安佐子、Martin Fausel

【彫刻部】
浮田 麻木、小嶋 満明、仲田 耕治

【SD部】
関家 美紘、西野 芙佐子

《彫刻部シード作家》

受賞者の中から翌年無審査で本展に出品できる作家を選びました。今年は、小口偉、小嶋満明、仲田耕治の3氏です。

《第82回新制作展の開催案内》

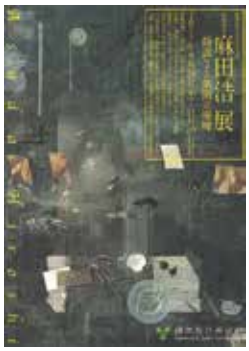
開催期間：平成30年9月19日(水)～10月1日(月)
搬入受付：平成30年9月5日(水)、9月6日(木)

《物故会員　展覧会情報》

◆ 7月8日、塩江美術館にて故・江戸健氏を偲び「江戸健先生を語る会」が開催されました。

◆ 長岡造形大学展示館MaRouの杜では、故・丸山正三氏の約3,000点に及ぶ絵画と、約8,000点の習作やスケッチを展示・収蔵しています。
2017年度［前期展示］5月2日～8月29日
［後期展示］9月1日～11月30日

◆ 9月28日～11月19日の期間、練馬区立美術館にて故・麻田浩氏の展覧会「没後20年 麻田浩展 -静謐なる楽園の廃墟-」が開催されました。



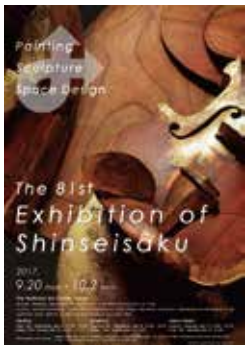
◆ 10月7日～11月26日の期間、松本市美術館にて故・細川宗英氏の展覧会「彫刻家・細川宗英展　人間存在の美」が開催されました。

第81回展授賞式（国立新美術館講堂）

《賞 牌》

第81回展新作家賞受賞者に贈られました。

「ひと」 岡崎 紀
水彩、鉛筆、木炭　24.3×33.4 cm



第81回展英語版ポスター

《伝言板》

● 図録のバックナンバーについて
引き続き寄贈可能の号がありましたら、皆様ぜひご協力をお願いいたします。

編集後記

会報誌がカラー化に伴い広報誌となって早7年経ちました。「新制作には新しいものが生まれる温床がある」と言った大先輩がおられました。そんな魅力や情報を少しでもお届け出来れば幸いに思います。今回もご寄稿、ご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

（岩間）

新制作協会

〒160-0022
東京都新宿区新宿 6-28-10 大阪屋ビル202
Tel:03-6233-7008　Fax:03-6233-7009
URL:http://www.shinseisaku.net/
E-mail:webmaster@shinseisaku.net
発　行 / 新制作協会
企画・編集・制作 / 広報委員会広報誌編集委員
千葉 文隆、山口 都、岩間 弘、
本田 悦久、中野 威
監　修 / 石松 豊秋
発行日 / 2017年12月

＊広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務所迄ご連絡ください。